

(研究ノート)

ドイツの日常語と科学用語 <中>

河 野 収

Arbeit という言葉は、ゲルマン語共通のもので、原義は「苦痛、労苦」であるが、英語の場合はこの語が消失し、かわって work (<wirken) が登場した。特に work より厳しい筋肉労働を意味する labor は、ラテン語の labor (=labos, labots) に由来する。スラブ語の robota (強制労働) は、ラテン語の l と r との交替による同系語とする説がある。今日ではチャペックの造語「ロボット」(Roboter) が、人間にかわって活躍する時勢となった。

Arbeit の概念は、手工業の領域に押し入って、物質的、道徳的に拡大した。人生のきびしさの大切なことを歌った讚美歌作家ルターの言葉は、人々のライトモチーフとなった。Arbeit はこの世における人間の天職だという道徳的な価値をルターは強調すると同時に、Arbeit に騎士道の倫理や、中世の神秘主義にみられるような性質をつけ加えた。すなわち Arbeit は労苦 (ラテン語 dolor) であることにかわりがなかった。ich habe die heilige Schrift über zwelf Jar geleret und mit großer schwerer Arbeit. (私は聖書を12年以上教え、大へんな辛苦をなめた。) ルターは Arbeit を Erbeit と書いた。

シラーは「労働は市民の誇り」(Arbeit ist des Bürgers Zierde) とドラマ „Die Piccolomini“ (1800年) の中で述べ、その後1808年にフランスの空想的社会主義者フーリエ (Charles Fourier) は、労働権 (le droit au travail) を道徳的な要求に高めた (フランス語の travail は英語の travel と同じで、「旅行」は労力を要するつらいものと昔は考えられているところ

から Arbeit の意が生じた)。その当時は一日の仕事を終えたあとには、楽しい団らんの夕べが待っていた。文字通りの Feierabend (休息时间) である。ゲーテがバラード „Der Schatzgräber“ (1797) で歌った Tages Arbeit, abends Gäste!/Saure Wochen, frohe Feste! (昼は働き, 夜は客, つらい週日, 楽しい祭日) であった。

1875年ベーベル (August Bebel) とラッサール派が, Gotha において合同してドイツ社会民主党の前身である「ドイツ社会主義労働党」を創設したとき, 労働は「すべての富と文化の源泉である」(die Quelle alles Reichtums und aller Kultur) という共通の確認を旗印にしている。人々は富と教養をもちたいと願った (Kultur の代りに Bildung とも言った)。そしてそこへ至る道が労働 (Arbeit) であった。すなわち „Kultur“ は汗をとまなう精励恪勤の労働によってつくることのできるものであった。労働は個人個人の奪うことのできない特技であった。だから失業 (Arbeitslosigkeit) が呪いの言葉になった。新しい科学や工業の発展に人々は驚きの眼を見はったが, 工場労働でなく, 根源としての Arbeit を口をきわめてたたえた。工業労働者にとって, 人生とはあがきと絶望の果てしなき繰り返しであり, 働いても悲惨な貧困に打ちひしがれた人々は, 労働を憎みはじめた。信心深い者は「祈れ, そして働け」(ora et labora) という修道僧の古い格言をもじって, 「まるで労働が役立たないように祈れ, そしてまるで祈りが役立たないように働け」と警告した。

Heinrich Seidel (1842—1906) は『労働の賛歌』と題する敬虔な熱情を吐露した荘重な詩を書いた。

労働, 労働, 祝福の泉

労働は魔法のことば

労働は幸福のころも

労働は平和の宝

労働だけが救済できる

労働だけが鎖を断ち切る

労働は民衆を自由にする

技術者詩人 Max Eyth (1836—1906) はシュワーベン人であるが、北ドイツの帝国主都を歌っている。

労働は世界を解放するもの
 たとえのろくとも鎖を断ち切る
 はびこった狂気の怠惰は去った
 労働の子らは、ベルリンよ、汝を歓迎する
 汝、休みなき活力を創る都市よ
 汝、生气あふれる労働の都よ

これは全能の神への呼びかけのように響いた。

確かに労働は「魔法のことば」であり、「新しい原理」³⁾になった。ヘシオドス (BC 700年頃) の言うように労働は「恥ではない」どころか、「気高くする」⁴⁾能力を得た。しかしマルクスは、労働はそれ自体から何かを生産することができることを認めた。それゆえ労働力の商品化により、労働者は自己およびその家族の生活の維持に必要なだけの価値をつくり出すばかりでなく、資本家によって支払われない剰余価値をつくり出すと説いた。

「労働者」なる語は、マタイ伝20章にある主の「ぶどう畑で働く人」(Arbeiter im Weinberg) のような、神に奉仕するために召される人を言うだけではなくになった。日雇 (Tagelöhner) や職人 (Handwerker) を意味していた Arbeiter は、特に19世紀に至って工場労働者を言うようになる。Arbeiter という呼称が次第に政治的な調子を帯びてくるのは、ラッサールの登場以来である。1864年「労働者大隊の重苦しい行進」(dumpfer Marschtritt der Arbeiterbataillone) が全世界に響き⁵⁾、Arbeiterbewegung (労働運動) がさかんになった。筋肉労働者 (Arbeiter der Faust) と頭脳労働者 (Arbeiter der Stirn) という別の視点に立った区分は、あまりにもあらっぽい単純化だとして入れられなかった。それに対して Arbeiter より幅広い意味での Arbeitnehmer がつくられた。これは地位的な義務や判断を

行なうといった拘束性が一切なく、古い特権的な仕事の義務も負わない。結局 Angestellter (被雇用者) も Arbeitnehmer であった。この無色透明のガラス張りとも言うべき Arbeitnehmer に対して、Arbeitgeber (雇用主) ができた。女子労働者 (Arbeiterin) は労働問題の論争の対象になるとときには、weiblicher Arbeiter と呼ばれた。職業の専門化によって Facharbeiter (専門工) が生まれるとともに、古い立派な基根語 Arbeit に悪い概念がくっついてくるようになる。ungelernter Arbeiter (未熟練労働者)、Gastarbeiter (出かせぎ労務者) など。

第二次世界大戦後の特徴は、多くの人の労働に対する態度がかわってきたことである。戦後の苦難の時代は、臨時の仕事が新しい価値を得た。職業を追われた者、復員学生、闇商売でかせぐ者は、短期間のもうけ口を発見し、利用する機智を身につけた。このような臨時の小さな仕事を Job⁶⁾ と表現した。語源不詳とされる英語の Job の概念は、すでに80年以上まえから知られ、これまでさげすまれてきたのが、ドイツに住みついた。その動詞 jobben (バイトする) は主として学生の間で使われた。最近ではコンピュータの行う仕事も Job である。

他方、時代の特徴が中立的な名称を前面に押し出した。Sozialpartner (労資双方) あるいは Tarifpartner (労働協約当事者) は互いに話し合いに入った。Meister (親方) は Kapitän となって Industriekapitän (産業界のボス)、つまり Unternehmer (企業家)、Kapitalist (資本家) が、Arbeiter と相い争った。Betriebsangehörige (企業構成員) は社長 (Chef) と、その部下 (Untergebener) である Facharbeiter (熟練工) と Hilfsarbeiter (臨時工)、あるいは Angestellter (事務員) である。かように Arbeiter という語は規定するのがむずかしくなっている。特にやっかいなのは幹語の Arbeit である。これは道徳的、宗教的価値あるいは感情面からの価値であったばかりではない。考え、設計し、建造しながら技術の世界に貢献する者は、Arbeit が「力と距離の産物」であることを知った。すなわち Arbeit はエルグ (Erg) によって測定し、あらゆる技

術的作業の核心として把握できる物理学的計算量である。ここに人間的なものと技術的なものとの出会いがある。両者は結びついて、相互に交換可能になった。Arbeitsmaschine は人間や動物、または電流によって動かされて仕事をする「作業機械」であるが、この語が機械的に重労働を行う人間にも使われると、Ich bin keine Arbeitsmaschine (おれは機械じゃないぞ) と叫びたくなるだろう。Das Herz arbeitet (心臓が働く) ばかりでなく、機械も「働く」、金を働かせる (Geld arbeiten lassen)。ついに Arbeitskraft (「労働者」) は家政婦、下男あるいは事務員そのものを意味するようになった。ここでは概念がひっくりかえって、人間と事物の間の境界は消えていく。

Kraft はもともと生き物や事物の「活動能力」とか、法律の「効力」を意味した。Kraftbrot (薬用パン) や Kraftmehl (澱粉) はすでに16世紀に使われていた。ゲーテは滋養飲料の「濃厚肉スープ」Kraftbrühe を飲んでいて、しかし電気がこの語を支配して Kraftwerk (発電所) を建設し、Kraftwirtschaft (電気産業) をおこしたとき、明瞭さを欠くようになった。今日 Kernkraftwerk (原子力発電所) の建設に反対する運動が活発である。また19世紀から20世紀にかけてできた新造語 Automobil (「自動車」はギリシア語 autós とラテン語 mōbillis との雑種) は Kraftwagen にドイツ語化した。Krafttrad (軍隊語では Krad と短縮) も同じく Motorrad (オートバイ) の代替語である。先述のように、人を Arbeitskraft と見る者は、彼のとりまく環境を巨大な Kraftfeld (力の場) と見なしている。Bürokräft (事務員), Schreibkräft (書記), Lehrkräft (教員), Hilfskräft (助手), Streitkräfte (戦闘要員) など。Er sucht für sein Geschäft eine weibliche Kraft. (彼の会社は女子従業員を求めている。) ここでは人間、能力、電流 (Kraftstrom) の間にほとんど差別がない。

このような混乱は、18世紀にフランス語を媒介して入ってきたギリシア語系の Energie を使うかわりに、Kraft を立てたことに起因しているのだろう。Kraft は19世紀末頃までは物質的な力よりも、むしろ精神的な力を

意味していた。「エネルギー政策」という場合は Kraftpolitik というよりも, Energiepolitik と言った方が誤解が少ない。もう一つ関連した例をあげよう。Fabrik という外来語が, ドイツのテキストにはじめてあらわれたのは17世紀のことで, 「製造, 製造法」という本来の意味をもっていた (フランス語 fabrique からの借用語)。現代的な意味は18世紀にあらわれる。多くの人々が統一的な計画にしたがって商品をつくる建物あるいは空間から, 後には工場自体およびそこに働く人間, Fabrikant (工場主), Fabrikdirektor (工場長), Fabrikarbeiter (工員), Fabrikmädchen (女工) などを言うようになった。今日 Lernfabrik なる語が現われている。プログラミングされた授業をしてくれるところであるが, 大方の人々は „lernen“ は生産できないと思っているし, マスプロの性格がその教育のきわだった特徴として強調されているので, 新教授法もよい効果をもたらさないと感じている。

こういった例はいろいろ挙げることができるが, それらを観察すると長い間に, より合理的な造語に取り替えられていき, 危険性は存在しない。これはおそらく, 技術化時代が言語における用心深さを要求するからだろう。技術はその専門語の明瞭さ, 一義性を求めればもとめるほど, その利用者に一層大きな可能性を与えた。だから専門用語から派生した形容詞 technisch は, 日常語につかわれてあいまいになったという技術者の憤まんがある。「technisch unmöglich (技術的に不可能) である」, 「technische Gründe (技術的理由) をつけて釈明する」, 「technische Schwierigkeiten (技術的困難) においやられる」, 「technische Vollendung (技術的完璧) と称賛される」, といった言葉は大抵, 話者の個人的な事実に根拠づけられている。正確さを身上とする技術 (Technik) は, なまけ者の隠れ家, あるいは不快さを増す逃げ口上となる。Industrie という語も18世紀の中頃, フランス語を経て入ってきた。「仕事熱心」という語源の意味から, 19世紀にはじめて今日の意味に定着し, 今や行くえ知れぬ漂流を示しはじめた。Industrieanlage (工場施設, プラント) はまだ理解でき

るであろうが、Industrieberater（産業コンサルタント）の場合、どうい
う職業なのか、もはや定かでない。

健康の維持と増進は、工場労働者ばかりでなく、誰もがいただく最大の願
いである。健康の保持を攻究する衛生学（Hygiene）の語と学問は、Hans
Peter Frank が統一的な概念にまとめあげた（1766年）。このギリシア語
系外来語から „Gesundheitspflege“ の語をつくったのが、現代科学的衛生
学の基礎を築いた ペッテンコーファー（Max von Pettenkofer 1818—
1901）である。この概念は日常語の領域においても反響した。Körper-
pflege（保健体育）、Zahnpflege（歯牙衛生）、Schönheitspflege（美容術）
などである。また Musikpflege（音楽の擁護）と称してドイツ音楽の危機
をほのめかそうとし、これが言語に用いられれば、Sprachpflege（正しい
言葉づかいの育成）となった。seine Freundschaft pflegen（友情をはぐ
くむ）、verwandtschaftliche Beziehungen pflegen（親類関係を大事にする）、
die Dichtung pflegen（文学を奨励する）など古くから使われてきた
pflegen は、今や病院や実験室、薬品のにおいがしてきた。

種痘（Kuhpockenimpfung）の成功、各種病原体の発見とその純粋培養
によって、伝染病的的確な予防対策がとられるようになった。1874年予防
接種法（Reichsimpfgesetz）の施行で、強制接種（Zwangimpfung）がド
イツ全国で実施された。接種は成功が肝心で、その方法（かき傷をつける
か、注射するか）は問題にされなかったので、Schluckimpfung（ワクチ
ン服用）も急速に普及した。しかし dem Gesprächspartner *eingepfift*
werden müssen は、「話し相手に深い感銘を与えねばならぬ、大いに強
調して言わねばならぬ」という意味に使われた。かくして19世紀後半には
医者に対する昔の不信がなくなって、*verarzten*（医者のように手当する）
という語ができた。seine Freunde *verarzten*（友人に忠告する、友人の願
いを聞く）は比喩的な意味での人助けの手当である。

自然療法（Naturheilkunde）ではシュレージエンの農民 Vinzenz Prieß-
nitz（1799—1851）が始めた プリースニッツ式冷湿布（Prießnitzum-

schlag), 次いで牧師 Sebastian Kneipp (1821—1897) のクナイプ式水浴療法 (Kneippkur) がある。クナイプ式サナトリウム (Kneipp-sanatorium) のクナイプ式水浴 (Kneippbad) で水浴療法をする (kneippen) 方法は次の通り。洗淨→全体又は部分的な水浴→シャワー→湿布→蒸気噴射→灌腸, さらに日光浴や, 体操をしたり, 療養食をとることが加わる。デンマーク人 Jørgen Petersen Muller (1866—1938) は家庭体操を促がした (著書『私の方法』1904年)。やがてオランダ出身のアメリカ女性 Bess Mensendieck (1864—1958) が登場した (『婦人の保健体育』1906年)。男はミュラー式室内体操をし (müllern), 女はメンセンジーク式体操をした (mensendiecken)。マッサージはずっと以前からオランダの医師 Georg Mezger (1838—1909) がドイツにも普及させた (1870年頃)。同じ頃 Baltzer (1814—1887) は菜食主義 (Vegetarismus) を唱道した。1900年頃ドイツにおける熱狂的なツァラトウストラの教えを利用し, ペルシア起源をよそおった「マスダスナーン」Mazdaznan (<古代イラン語 mazdao 「全知の」) と称する生活改造 (Lebensreform) 運動が起った。その創始者は Otto Hanisch である。彼は自称 Otoman Zar-Adusht Ha'nish, 1844年テヘラン生れとあるが, 正しくは1854年ポーランドのポズナニ生れ, ロスアンゼルスで1936年没。この運動は心身の発展のために呼吸の修練を行ない, 神の呼吸にするのと, 菜食メニューを日々の合いことばにするのである。科学的・医学的および宗教的考えが混淆して, あまりはっきりしないにもかかわらず, 大衆うけした。

このような生活刷新の叫びは, いろいろな形であらわれた。禁酒運動は1877年ジュネーブの牧師 Rochat の青十字協会 (バッジによって命名) が進めた。肉食排斥は, ビタミン (Vitamin<ラテン語 vita 「生命」+イギリスの J. C. Drummond の命名による amin) の研究によって Rohkost (生の果物, 野菜, サラダ, クルミ料理) がよいという, いわば科学的に裏付けられた結果による。新しいスローガンをかかげて自然食品店やスポーツ店が繁盛した。禁酒の青十字の家と野菜食のレストランが, 旧式の

料理屋の隣りに建った。体育では Hellerau 派や Loheland 派, 更には 1904年ベルリンに体育学校を創立したアメリカの Duncan 姉妹らの, 徒手体操とダンスを結合させたリズム体操が注目を浴びる。そしてその頂点に立ったのが, ルドルフ・シュタイナー Rudolf Steiner(1861—1925)のつくった歌と運動の結合による人智学的表現術オイリュトミー (Eurhythmie) である。オイ (Eu) はギリシア語で「美しい」の意であり, リュトミーはリズムである。そのほか禁煙運動, コルセット無着用運動, 逆症療法反対運動などである。病気の原因に立ち向かおうとして考え出された逆症療法 Allopathie (<ギリシヤ語 allos „anders“ + pathos „Leiden“) とは逆に, 病気の症状と似た症状を起す劇毒薬を投与する 治療法 Homöopathie (類似療法) は, ハーネマン (Samuel Hahnemann 1755—1843) によって 1810年ライプチヒで始められ, そのほかの地域にも次第に広まっていった。in homöopathischen Dosen seine Ermahnungen verabreichen (類似療法的分量で忠告する→徐々にあるいは慎重に忠告を与える) という言い回しもできた。

民間運動のもつ言語的な業績は, 特に医学概念を簡略化した形や内容で民衆の間にひろめたことにある。例えば Organ (器官) は広い意味に使われるようになり, 「役人」を呼ぶとき Organ des Staates (国の機関) と言った。若者を理解しない者は verkalkt (硬化した→頭が堅い) と非難された (verkalkter Trottel! 老いぼれめ)。重大な処置を必要とする用件は verarzten (手当する→てきばき解決する) せねばならなかった。心配ごとは jemandem schwer im Magen liegen (人の胃にもたれる→気が重い), 抑うつ症 (Depression) を呈しておれば, aufpulvern (薬で直す→元気づける) し, トランキライザー (英 Tranquilizer, 独 Tranquillans) と称する鎮静剤 (Beruhigungspille) がきかないときは, Pferdekur (馬の治療→荒療法) を試みなければならなかった。Pferdekur の語が使われたのは16世紀頃からである。当時馬の治療は鍛冶屋にゆだねられていて, 馬に蹄鉄をつけるだけでなく, ひどいやり方で馬の病気の処置をしていたこ

とに由来する。化学者リービッヒ (Justus von Liebig 1803—1873) の Chloroform (発見1831年, 命名1834年) は, 発見後17年たって初めて麻酔薬 (Narkosemittel) として, イギリスの医師 J. Simpson 卿が手術に使った。これが慣用的な言い回しとして, くどき落とされたり, ぼうっと無意識になったり, 酔ったりした者は, chloroformiert または narkotisiert していると見られた。オランダ人 Mathysen の発明した「ギブス包帯」Gipsverband (1852年) は, 当時流行のひどく窮屈なカラーに対するニックネームとなった。Gipsschlips (ギブスネクタイ) は自分で結ぶネクタイでなくて, 前もって型がつくられているネクタイを意味した。

しかし大抵の医学の概念はその範囲以上には出なかった。それは例えば, キニーネ (Chinin) やコカイン (Kokain) のような薬品にあてはまる。これらはケチュア語を話すペルーからイタリアを經由して入ってきた。19世紀の病名もやはり医学の領域にとどまった。例えば昔民間で Bräune (皮膚褐色という意) と呼んでいた Diphtherie (<ギリシア語 diphthera 皮膚) がそうである。また コッホによる 1882 年の結核菌 (Tuberkelbazillus) の確認や, その翌年のコレラ菌 (Cholerabazillus) の発見で普及した Bazillus (ラテン語 bacillus「桿」に由来) という語も, 利用は多くなったが, 意味は広がらなかった。同義語に属する Bakterie (バクテリア) と Bazillus の間の区別は不十分であったが, バチルスの方がよく使われた。すなわち「暴徒」のことを Spaltbazillus (分裂バルチス) と言った。Reinkultur (純粋培養) はやがて (正真正銘) に意味転換もする。Das ist Kitsch in Reinkultur. (それは全くのいかさまだ。) コッホによる殺菌, 消毒の試験や処理は, Desinfektion (消毒, 殺菌) や Sterilisierung (滅菌, 殺菌) の語を内容通りに通俗化した。これの派生語として desinfizieren, sterilisieren, steril, Sterilität などがあげられる。steril (無菌の, 不妊の) は「創造的でない, 不毛な」と比喩的になった。さらに auskochen (煮沸消毒する) は ein ausgekochter Kerl (海千山千の奴) というふう

に転義的に用いられた。

オーストリアの病理学者 Karl Landsteiner は、4種の「血液型」Blutgruppe (O, A, B, AB) を発見し (1910年), ノーベル医学賞をうけた。おおよそ1930年頃から軍隊手帳に軍人の血液型が記入されて以来, Das ist meine Blutgruppe (それは私の血液型だ→私の趣味だ) という慣用句ができた。またスウェーデン人フォーレーウス Fåhrus は「血沈」Blutsenkung の臨床的意義に注目した (1917年)。物理学からそのままとった食物の「カロリー」Kalorie (「熱」の意のラテン語 calor に由来) や, ポーランド生まれのアメリカの生化学者フンク Casimir Funk が1912年に提唱した Amine (アンモニアの水素原子を炭化水素基で置換した化合物) 系の全化合物に対する造語「ビタミン」Vitamine (生命 vita に必要なアミンの意) などの語は, Blutgruppe や Blutsenkung とともにキャッチフレーズ化された。第二次大戦で Vitamin B (1897年オランダのエイクマン Eijkman によって脚気にきくことが明らかにされた) は, 顔のきく有力者との「コネ」に転義した。この場合Bは Beziehung (関係) のBから来ている。戦時中の食料統制下では, 食料カードの配給だけでは足りず, 追加の食品を工面するには Vitamin B に頼らざるを得なかった。非常に良いコネを意味する Vitamin B₂ は, 1960年頃から使われるようになった。1892年ロシアのイヴァノフスキーによって始められた Virus (ラテン語「毒」) の研究は, 1932年に痘瘡ビールス (Pockenvirus) が発見されて以来, 一般の関心を引きこんでいった。ことに1953年に電子顕微鏡による観察が可能になり, またインフルエンザのひんぱんな流行の不安によって関心が高まった。形容詞の virulent (伝染性の強い, 悪性の) は, やがて医学以外の領域に入って, 例えば virulente Idee (非常に効果のある考え) というように用いられる。

体をコントロールするものが, 腺 (Drüse) と呼ばれるある種の器官である。ふつう人々は自分の健康状態とその腺とを結びつけて素人診断を下す。なにか原因不明の不快感がある場合, Ich habe es an den Drüsen (私は腺の調子がよくない) という。この Drüsen は俗にリンパ腺

(Lymphknoten) を指しているが、実際、ある種の腺は、われわれの気分や肉体的な反応に、大きな影響を及ぼしている。腺とは、ある物質を分泌するなんらかの細胞または器官と定義できる。それぞれの分泌のしかたに応じて、外分泌腺 (Drüsen mit äußerer Sekretion) と内分泌腺 (Drüsen mit innerer Sekretion) がある。前者の分泌物は皮膚の油汗や唾液、あるいは消化管や気道からの粘液である。auf die Drüse drücken (同情をひこうとする) という慣用句の Drüse は涙腺 (Tränendrüse) を意味している。しかし drücken には涙腺を刺激して他人を感動させるのではなく、ここでは策略的な押しつけが見られる。内分泌腺は体の機能の重要な化学的調節器で、内分泌腺によって分泌され、その化学的な使者の役目を果たす物質がホルモン (Hormon) とよばれるものである。

ホルモンという言葉は、ギリシア語の「活動をおこさせる」という意味の horman に由来する。ギリシアの名医ヒポクラテスは、体の分泌物に含まれていて、からだ全体を活気づけると信じていた精力を説明するのにこのギリシア語を用いた。医学辞典にこの言葉が載せられるようになったのは比較的近年のことで、今世紀の初めにイギリスの生理学者によって採用された。最近、重要なホルモンが副腎 (Nebenniere) によってつくられていることがわかった。その一つは副腎皮質ホルモン (Nebennieren-Rindenhormon) で、もう一つは副腎髄質 (Nebennierenmark) でつくられるホルモンである。前者はアメリカの研究者によって抽出され、今日「コルチゾン」 Kortison (Kort(ex) 皮質+S(terol) ステロール+ on 誘導体) として知られている。体内の塩分と水分のバランスを調節させる重要な役割を果たすほか、炎症をおさえたり、抗アレルギー効果が強い。Allergie はギリシア語の allos「異なる」、ergia「働き」で、文字通り「変作動」である。比喩的に、人や言動などに対する「反感」、「けぎらい」の意味にも用いられる。Ich bin gegen dein Geschwätz allergisch. (ぼくは君の長話が大きらいだ)。後者の副腎髄質ホルモンは、「アドレナリン」 Adrenalin (ラテン語 ad「…の上に」+renes「腎臓」) として一般に知られ

ている興奮要素である。われわれが興奮したり、恐怖したり、また怒ったりするようなストレス (Stress) 状態にあるとき、このホルモンが呼吸を速め、血圧をあげ、反射神経を鋭くさせたりして、防御態勢にある体を戦わせたり、逃避させたりするのである。こうした反応は1945年オーストリア系カナダ人ハンス・セリエ Hans Selye 博士の唱えた、いわゆる「適応症候群」Adaptationssyndrom と考えられるものである (Syndrom はギリシア語で「合流」という意)。Stress という言葉は、まず精神医学のキーワードの一つとして登場し、その後次第に日常語化されたようである。der Stress des Lebens in der Großstadt (大都市生活の重圧), der Stress beim Autofahren (自動車運転の緊張) や unter Stress stehen (精神的に参っている) など。今日のように精神的ストレスの多い時代には, Mehr Spaß, weniger Stress (気晴らしで, ストレスの解消を) をモットーとすべきであろう。

1880年頃までは、文明社会における精神的な病気の治療は、まだそのころ芽を出しはじめた科学的知識によって授けられたという程度であったが、やがて精神病理学者や、神経学者などの医学の専門家の手にゆだねられるに至った。とりわけ1889年以来フロイトとその初期の協力者であるウィーンの医師ヨーゼフ・ブロイアーによって、精神分析の新分野が開拓された。彼らは催眠法 (Hypnose ギリシア語系) を活用し、患者が催眠状態にある時に、心のいたで、つまり心的外傷 (psychisches Trauma) を自由に語らせるようにした。その過程のなかで自己のほんとうの情動 (Trieb) を再体験し、意識面にあらわれないよう心の深層に抑圧 (Verdrängung) されていた「しこり」を、カタルシス (Katharsis ギリシア語系) で浄化されれば、「消散させる」 (abreagieren) ことができ、「神経症」 (Neurose ギリシア語系) の治療の上で効果をもつとフロイトは考えたのであった。

しかしフロイトは無意識 (unbewußt) の世界を探るため、「催眠法」および「カタルシス」という初期の分析技術をやめて、「自由連想」 (freie

Assoziation) すなわち頭のなかに浮かぶイメージをつぎつぎに連想させ、心のなかの感情的なしこり（「コンプレックス」Komplex ラテン語系）を見いだそうとした。この方法で彼は、一見混乱した思考の系列の中に、強い感情的な衝動（Trieb）や心の葛藤（Konflikt）の原因を追求することができることを知った。こうして「自由連想」が患者の夢や思い出に現われることを学びとって、夢や日常生活の心理の研究に向ったのである。特に主著『夢判断』（„Die Traumdeutung“ 1900年）によって一般人のもつ心理現象に立ち入り、さらに『日常生活の精神病理学』（„Zur Psychopathologie des Alltagslebens“ 1901年）で言いまちがい、書きまちがい、読みまちがいなどを扱い、これらが無意識の表現と論じた。フロイトの理論は大いに論議を呼び、精神分析が多くの専門科学の概念や用語を広めた。

このように一方では深層心理学（Tiefenpsychologie）、他方で精神療法（Psychotherapie）が、深層心理学者（Tiefenpsycholog）や精神療法専門医（Psychotherapeut）の研究によって、心理学（Psychologie）の幅広い発展に寄与した。心理学は教育、職業選択、職業指導に対する意義をたえず高めた。例えば Anpassung（適応）、Einfühlungsvermögen（感情移入能力）、Geltungsstreben（顕示欲動）、Labilität（不安定）、Psychose（精神病）、Reflex（反射）、Spannung（緊張）、Suggestion（暗示）、Ausgleich（補償）などのような概念が移植された。それらの言葉はすべて、これまで知られなかったわけではないが、今や科学的世界から出て汎用化された。「ルサンティマン」（Ressentiment）は心理学に由来したことが忘れられ、1930年頃からその領域が政治や私的なものに拡張された。Max Frisch は „das menschliche Ressentiment gegen die Maschine“（機械に対する人間の敵意）と表現している⁷。H. スペンサー（1820—1903）が「進化」（Entwicklung）の概念の解明に使った „Integration“ は、イエンスユ（Erich Jaensch 1883—1940）によって Typenlehre（類型論）に導入され、心身の個別機能の全体への「統合」を意味した。Koexistenz 共在（いくつかの性質の並存）も心理学の専門語であったが、friedliche

Koexistenz (平和共存) とフルチショフが唱えることによって、政治がこの言葉に乗っ取った。

コンピュータ技術は、病人にエレクトロニクスの看護婦を贈った (1967年)。チュービンゲン大学付属病院 (Medizinische Universitätsklinik Tübingen) では、コンピュータが7ヶ所の検査室からデータ (検査値) を受け取り、担当医に患者の処置に対する診断資料 (diagnostische Unterlage) を与える。患者が入院した場合、このシステムにくりこまれることになった⁸⁾。患者の個人的データはコンピュータ・カードボックス (Computer-Kartei) にはいる。この瞬間からコンピュータは新患者を知り、迅速に手当をおこなう。回診 (Visite) の資料はスピード印刷機でコピーされ、医師が臨床にあらわれると、コンピュータによって説明文のつけられた処方箋 (Verordnungsformular) と、Pathologica-Bogen と称せられる「カルテ」が目の前にある。医師は必要な検査と所見 (Befund) をそれに書き込む。患者に、例えば EKG (心電図 Elektrokardiogramm の略語) あるいは血液検査 (Bluttest) が必要とされた場合、看護婦はマークシート用紙 (Markierungsbeleg) に鉛筆で線を引くだけでよい。読取機 (Markierungsleser) がちゃんと読み取ってくれる。看護婦はもはやメモをすることも、回診簿 (Visitenbuch) もいらぬ。コンピュータが検査室でサンプリングや必要な分析の処置をとる。

昔の伝染病 (Epidemie) はほとんど完全に食い止められたが、今もっとも恐れられているのは「がん」Krebs である。ラテン語 cancer (かに) の借用訳語である Krebs が、ギリシア語 Karkínos (かに) からとられた専門名 Karzinom (がん腫) にとってかわった。皮膚や消化管の中側など、外界と接しているからだの部分をおかす「がん」と、「腫瘍」とは厳密には異なる。腫瘍 (Tumor = Geschwür) はからだに生ずる異常増殖を指し、ラテン語 tumere (膨張する) に由来する。いぼのように限られた増殖をする腫瘍は身の危険はともなわない。そこでこれを 良性腫瘍 (gutartiges Geschwür) という。他方、死に至るまで際限なく増殖する型の腫瘍を悪

性腫瘍 (bösaartiges Geschwür) という。「がん」と言わずにこの「悪性腫瘍」という思いやりのある言葉が使われている。

おそらく、慈悲深く包み隠すことは医学の本質のようである。医者は患者やその家族に対しては、危険のない表現を用いる。昔は残忍にも Irrenhaus (気狂い病院) と言ったのが、Heilanstalt (療養所) にかわり、それからあとの部分だけとって Anstalt になった。したがって「彼は神経科の病院にいる」ことを、たんに Er ist in der Anstalt と言うのである。Selbstmord (自殺)⁹⁾ は教会や国家から軽べつされ、大罪と見られた。1918年以降寛大に考えられはじめて、Freitod になった。近年医学的名称に Suizid が使われている。これはラテン語の断片から組み立てられたもので、古い「自殺」そのものをあらわしているが、恐ろしい事実を外国語の衣裳をまとして表現した婉曲語法と考えられる。

近年西ドイツでは覚醒剤依存者の数が増加している。44,000人とも60,000人とも言われる。特に18~20才の若年層600万人中、覚醒剤常用者(Fixer)は24,000名にもものぼる。精神異常をきたして死亡する者は、年間300人を数えている¹⁰⁾。中毒患者の増加した理由の一つは、ヘロインが安価で手に入り、てっとり早く「幻覚症状」(Trip)に陥ることができるようになったためである。ヘロイン(Heroin)のほか、阿片(Opium)、LSDをharte Drogenと称し、Haschisch(「大麻」のアラビア語読み、略語Hasch)、Marihuana(インド大麻の誘導體バングのメキシコ名)のようなweiche Drogenと区別している。最近話題をにぎわしている薬物LSDは、わずか1万分の1グラムほどの量を服用しただけで自分の影と踊るほどの恍惚感にひたったり、おそろしい幻覚におそわれたりする。この化学成分であるリゼルギン酸ジェチルアミド(Lysergsäure-Diäthylamid)の、三つのことばの頭文字からとられてLSDとなった。「がん」を「腫瘍」と無害化したごとく、Rauschgift(麻薬)をDroge(薬物)と呼んで、14世紀以来定着している低地ドイツ語droge、フランス語drogueに、新しい辛らつな内容を与えている。今日、「ヤク」の消費は、まさに反抗する

若者のステータス・シンボルとなった。

医薬品工業の世論形成や言語形成に与えた影響は見逃すことができない。¹¹⁾ 薬局は化学実験室であると同時に、工場生産された薬品の販売所になった。Emil Fischer (1852—1919) はブドウ糖やカフェインの合成に成功し、「応用化学」に経済と工業への道を拓いた。催眠薬 Veronal (ヴェロナール) は彼がヴェローナ (Verona) へ旅行する直前に、この由緒のある町にちなんで命名したのである。かような類似の名称が他の薬にも現われるようになった。Ludwig Knorr (1859—1921) による風邪薬 Antipyrin の発見は、薬に Anti を冠した名をつけるはずみを与えた。Antiallergica (アレルギー治療薬), Antibiotica (抗生物質), Antihistaminkörper (抗ヒスタミン剤), Antineuralgica (神経痛治療薬), Antirheumatica (リウマチ治療剤), Antispasmodica (けいれん止め剤) などである。自動車の Antiklopfmittel (アンチノック剤) はおそらく、Anti-治療薬を言葉の見本としてとられたものであろう。このような技術語は古典の造語を前提とした。平均的な話し手にはそれらは魔法のことばであった。こういった効果はその響きによっても高められた。-on, -int, -in の語尾のついた薬ができた。例えば Pyr-amid-on (ピラミドン, 下熱鎮静剤), Form-a-m-int (フォルマミントはフォルムアルデヒド Formaldehyd と乳糖 Milchzucker の短縮語), A-s-pir-in (アスピリン Azetyl-Salizyl-pyr の略語, pyr はギリシア語の「熱」pyretós の意, 1899年 Dreser によって世に紹介せられる)。よい響きをもつ語尾のほか、心をひきつけるような前綴をつけたものもある。例えば、1910年エールリヒと秦佐八郎によって合成せられたヒ素含有薬サルバルサンは, Salv (ラテン語「安全な」)+ars (ギリシア語「ヒ素」)+an である。「新しい」を意味する neo (ギリシア語) あるいは novo (ラテン語) の前綴りのついた薬品名も喜ばれた。Neosalvarsan あるいは Novokain (=Neues [Ko-]kain) など。指導的役割を演じたのが、1887年以来 Leverkusen で医薬品を製造しているバイエル染料株式会社 (Farbenfabriken Bayer AG.) および、1863年創立の Frankfurt

a. M. にあるヘクスト染料株式会社 (Farbwerke Hoechst AG.) である。前者は Aspirin, Veronal, 催眠薬ルミナル (Luminal) の製造や, 1916年からは睡眠病治療薬ゲルマニン (Germanin) もつくっている。Germanin はドイツの古名 Germania (ラテン語) にちなんでいるので, 国民的感情に触れる命名である。後者のヘクスト染料では解熱剤アンチピリン (Anti-pyr-in), Pyramidon, コッホの「ツベルクリン」Tuberkulin (Tuberkul は小結節, 結核結節の意), Salvarsan, Novokain のほか, 第二次大戦後はペニシリン (Penicillin) をつくっている。ペニシリンは1929年にイギリスの細菌学者 A. フレミングによって発見され, 「アオカビ」のラテン語 penicillium から命名された。1940年以来人間に試されて効果のあることがわかり, 大量生産されるようになった。薬品が市場に出まわれれば, メーカーは自社の製品に対してPRする必要が生ずる。そのコマーシャルによっては不明瞭さ, 迷信, 災いがひき起こされるであろう。

医学の専門用語から日常語に入ってきたものは Diät (食養生), Hysterie (ヒステリー), Migräne (偏頭痛), Euphorie (多幸症) のような比較的古い単語であった。Augenpulver は18世紀頃よく利用された目の治療薬であったが, 新しい, より効果的な目薬 (Augenwasser) の出現によって, この古い薬が「目を害するもの」にかわった。Diese Schrift ist Augenpulver! (この印刷物は活字が小さくて目が疲れる) と日常語に用いられる。Blutdruck (血圧) は診察の時いつも経験することなので, 大衆の間で一種の病気のバロメーターになった。国民の健康を守る Reihenuntersuchung (集団検診) は Röntgen のX線によってはじめられた。フランス語の gripper (急につかまえる) に由来する Grippe (流行性感冒) は, すべての人の言語意識を強くとらえた。流感がひんぱんにはやった1958年には seine Grippe nehmen (流感だと言って病気休暇をとる) という慣用句も生れた。1863年 Henri Dunant のよびかけによる赤十字 (Rotes Kreuz), ボンに本部をもつ労働者福祉連盟 (Arbeiter-Wohlfahrt), 1897年創立のカリタス会 (Caritas ラテン語「慈善」の意) は遭難者に対する救

助のしかたを教えた。人々は die erste Hilfe (応急手当), die künstliche Atmung (人工呼吸), Armschiene (そえ木) を知っているだけでなく、それができるようになった。

医者も他の領域から、例えばスポーツから語彙を取り入れている。レースで他の走者の先頭に立って歩調を示す人が Pacemaker (ペースメーカー) であるが、医者は心搏を始動させ、その速さを調節する神経節をペースメーカーと言ったり、また心筋を電気で刺激して正常な鼓動を打たせるための脈拍調整器にも使った。第二次大戦後、この装置を心臓に外科的に移植することが可能になり、人工ペースメーカーとしてはたらいている。

今日、医学の最前線で活躍している人々は、人体の臓器をある人からほかの人に Transplantation (移植) したり、体力の損傷を受けている部分を人工の器官ととりかえるといった先端技術を開発した。Nierenverpflanzung (腎臓移植) がはじめて成功したのは1954年であるが、そのほか肝臓 (Leber), 心臓 (Herz) などの移植が大センセーションをまきおこした。お金を銀行に信託するように、医者や病院は緊急な場合に対して Blutbank (血液銀行) をつくった。視力を失った人々に新たな角膜を提供する (Augenbank) もある。かような方法で日常語も科学的な息吹きをふきかえた。

現代医学がかかえている難問は、生と死の判定、すなわち klinischer Tod (臨床的死) と biologischer Tod (生物学的死) であろう。人工臓器や臓器移植から、遺伝子 (Gen) や生命過程まで取り扱う Biowissenschaft (生命科学) も重大な倫理上の問題に直面している。1981年1月ジュネーブ大学の K. イルメンゼーらがマウスのクローニング (Klonen) に成功したことによって、クローン人間誕生の可能性が生じたことである。クローン (Klon) はギリシア語の「小枝」をいう。小枝は全く別の種類の木に接ぎ木をすることができ、接ぎ木された小枝はどんどん生長し、繁茂する。また、さし木した小枝は、完全な木に生長することができる。Klon ということばは、1個の体細胞から生長してできた細胞の集団、または一部分か

ら発達してできた複製生物を意味するようになった。

Zelle (細胞) という名称は古く、イギリスの物理学者 R. フックが名づけた1665年にさかのぼる。コルクの微小な穴に対してつけられた名まえであるが、小さな空ろな場所の意のラテン名 „cella“ に由来するのである。ドイツの病理学者 Rudolf Virchow は、生きている有機体はどれもみな一種の「細胞国家」(Zellen-Staat) を形成しており、細胞はすべてその市民であると結論した。そして病気は細胞と外部からの力との戦いであると主張した。フィルヒョーの細胞病理学 (Zellulärpathologie) は、もっとも小さい有機体に人間の全存在に対する最大の意味をもたせており、個々の人間ばかりでなく、共同生活する人間の多数は細胞国家として理解されねばならないという概念である。共産党も Betriebszelle (企業内細胞) といった形で、大きな組織の活動単位としての小グループの意味に使った。ナチ党の命令系統の下部組織には NS-Zellenleiter (ナチ党細胞責任者) がいた。

病院は患者を症例 (Fall) と見なし、すぐに書式化し、できるだけ無名にしておこうとする。人と物との垣根はとりはらわれる。入院患者は Zugang とよんで、「入口」と同じ語を用い、退院する者や死亡者は、芝居の「退場」を意味する Abgang である。患者名のかわりに病名の方を選ぶ。6号室の盲腸 (Blinddarm), 18号室の開放性 Tb (結核) といったようにである。やがて音楽家がそれをまねて、チェロ奏者に対して「彼はチェロだ」(Er ist das Cello), 鼓手には „Er ist die Trommel“ (彼はドラムだ) と言った。今日のように専門領域が多様化するにつれて、開業医 (praktischer Arzt) よりも内科医 (Internist), 整形外科医 (Orthopäde), 婦人科医 (Gynäkologe) にみてもらう人が多くなった。最近では性科学専門医 (Sexologe) や老人病専門医 (Geriatler) も加わった。昔は家庭医 (Hausarzt) が自分の患者を病気が治るまで終始面倒をみて、必要とする治療いっさいを行なったものである。今日、医療が細分化されるにつれて対人的親しみがなくなった。

われわれの科学的な知識や認識が増大すればするほど、個々の語を正確に定義するのが一層むずかしくなってくる。すでにガリレイは、¹²⁾ 日常語と科学用語が互いに危険にさらされているのを見てとった。「大小、上下、有用と実用についての見解は、人間的な思考のない日常の印象と習慣である。」何が大きい (groß) か小さい (klein) かは、¹³⁾ 同じものどおしで測られる。例えば小さい時計あるいは大きい動物は、さまざま大きさの観念から決められる。「睡眠」と「着物」に同じ形容詞 leicht (軽い) をつけたとき、双方に何らかの関係があるのか。leicht möglich (大いにありうるだろう) と leicht gekränkt (すぐに気を悪くする) の leicht はどんな関係があるのか。どうして Leichtfuß (のんき者) は非難の対象とされ、その形容詞 leichtfüßig (敏捷な) は長所と見なされるのか。逆に schwer (重い) の場合、schwere Krankheit (重病) は鉛のように「重い」のか、本は目方によって、あるいはその内容によって „schwer“ なのか。研究者も研究に対して形容詞をくらべる定点をおかねばならない。schnell と一緒に合成された名詞は多数あるが、科学技術の schnell (スピード) の新しい考えをつけ加えることにわれわれはやぶさかではない。音の高い (laut) と低い (leise) にも人によっていろいろに感じ、そして定義されるだろう。ある人にはがまんできると思えるフォン (Phon) の数値が、ほかの人にはひどい騒音のように感じられる。roh (生の) であるのはケース・バイ・ケースで考えられねばならない。Rohöl (原油), Rohzucker (粗糖), Rohstoff (原料) など。すでにそれ自体コンテキストでだけ読みとられる。形容詞のひとつひとつの意味が新しい科学的定義によってあいまいにされる。

それに加えて生ずる困難な問題は、同じ言葉が領域によって異なった意味をもつことである。例えば Kontamination は、言語学者には二つの語句の「混成」を意味するが、物理学者には放射性物質による「汚染」である。古代史家は Neolithikum を「新石器時代」と定義し、民族学者は「農民の社会形成」と規定する。Moderator ¹⁴⁾ はある人には高速中性子を

減速させるために使う物質であり、ほかの人にはテレビ政治討論会の司会者である。より大きな振動幅のところ（波腹）を、腹と同じ Bauch と称するのは350年来のことであるし、等価物、賠償の意味のラテン系外来語 Äquivalent は「化学当量」となる。地球の正反対側の住人 „Antipode“ は、化学の領域では鏡像的にあべこべの分子構造をもった化合物、「対掌体」でなければならない。

かように言語は、常に新しい表象をつくり出し、ますます古い言語表出を保持していく能力によって、生きている。これは言語の科学化と称する現象の背景である。科学化は否定し去ることはできない。科学化はわれわれの語彙をふくれあがらせるのにあずかって力がある。

注

- 1) Grimm, Deutsches Wörterbuch, 16 Bde., Leipzig 1854—1954.
- 2) DDR では老人ホーム (Altersheim) を Feierabendheim という装飾的表現を使っている。1日ならぬ一生の仕事が終ったあとの自由時間を過ごす家というわけである。(根本道也, 東ドイツの新語, 東京 1981, S. 145.)
- 3) E. Jünger, Der Arbeiter, Hamburg 1932, S. 85.
- 4) G. Büchmann, Geflügelte Worte, 32. Aufl., Berlin 1972, S. 485.
- 5) G. Büchmann, a. a. O., S. 732.
- 6) „Job“: vgl. W. Meurers. In: Europäische Schlüsselwörter, München 1964, S. 317ff.
- 7) M. Frisch, Homo faber, Frankfurt a. M. 1957, S. 105.
- 8) X—unsere Welt heute, Heft 4, 1969, S. 61.
- 9) K. Baumann, Selbstmord und Freitod in sprachlicher und geistesgeschichtlicher Beleuchtung. Phil. Diss. Gießen 1934.
- 10) Langenscheidts Sprachillustrierte, Heft 1, 1980, S. 9f.
- 11) A. Kutzelnigg, Terminologie der Warenkategorien, Frankfurt 1965, S. 35.
- 12) Das Zitat bei W. Gößmann, Glaubwürdigkeit im Sprachgebrauch, München 1970, S. 45.
- 13) Weitere Beispiele bei W. Gerlach, Die Sprache der Physik. Bonn 1962, S. 33f. (hart-weich, schwarz-weiß, heiß-kalt); W. Heisenberg, in dem Sammelwerk „Wort und Wirklichkeit“, hg. von der Bayr. Akademie der Schönen Künste, München 1960, S. 41.

14) „Moderator“: vgl. W. Gerlach, Die Sprache der Physik, S. 40.

参考文献は「ドイツの日常語と科学用語（上）」（同志社・外国文学研究第31号所収）に挙げたもののほか、次が加わる。

Duden, Das große Wörterbuch der deutschen Sprache, 6 Bde., Mannheim 1976—1981.

加藤正明ほか, 精神医学事典, 東京 1975.